
スペシャリスト

桜花蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペシャリスト

【Nコード】

N0163I

【作者名】

桜花蓮華

【あらすじ】

中規模警察署である武蔵中央署……。刑事課のメンバーは曲者ぞろい。しかし彼らはそれぞれの道を極めたスペシャリスト達だった……。

（注：現在休止中です。まとまり次第スタートです。）

登場人物

武蔵中央署 刑事課

神ヶ本 貴啓（かみがもとたかひろ）

29歳 警部補 係長

頭脳明晰。常に冷静。

キヤリアだが昇進する気がまったくない。

島村 幸輝（しまむらゆきてる）

23歳 巡査

刑事課新人。お調子者だが正義感だけは人一倍。
ずば抜けた運動神経を持つ。

伊藤 孝二（いとうこうじ）

45歳 警部 課長

個性派ぞろいの刑事課をまとめる豪腕課長。
署長にだけは頭が上がない。

春日 祐（かすがゆう）

34歳 巡査

神ヶ本曰く、口から生まれた男。
口げんかで右に出る者はいない。関西弁。

加賀美 宏明（かがみひろあき）

35歳 警部 課長代理

主にデータや資料管理を一任されている。

同期の春日とはよく衝突したりしなかったり。

牧野 麗（まいのれい）

39歳 巡査部長 主任

刑事課の紅一点。

元女優志望で潜入捜査のプロ。

松田 新太（まつだしんた）

26歳 巡査

伊藤課長に憧れを持つ。

裏社会の情報に長けている。

島村 晴菜（しまむらはるな）

20歳 巡査

交通課勤務。

幸輝の妹であり、貴啓の婚約者。

牛山 倫太郎（うしやまりんたろう）

50歳 巡査長 武蔵公園前派出所勤務

心優しい刑事。

近隣住人から熱い信頼を得ている。

斉藤 務（さいとうつとむ）

43歳 警部補 鑑識課主任

伊藤課長と昔からの知り合い。

杉 辰祢（すぎたつね）

53歳 警視 武蔵中央署署長

時折刑事課に現れてはアドバイスを告げる署長。

その目はすべてを見透かしている？

すれ違う絆、歌に込められた秘めた愛！ その1

ここは武蔵中央署・・・。

地域の安全を守る中規模警察署である。

その武蔵中央署の刑事課に一人の男が飛び込んできた・・・・・・・・。

「遅れてすいませーん！」

一見少年のようにも見える小柄の男・・・島村幸輝しまむらゆきてるは入ってくるなりそう叫んだ。

「こら！新人！気が抜けてるんじゃないのか！？」

そう言ったのは刑事課課長の伊藤孝二いとうたけ二。

この大きな伊藤課長と島村が並ぶとまるで親子に見える。

「まったく今日で何回目ですか・・・。」

そう呟いたのは・・・神ヶ本貴啓かみがもとたかひろ。

細身で白く、一瞬女にも見える男は丁寧な口調でそう言った。

「さっすがたかちゃん。やつさしー！」

「っ！！！」

何ですかそのたかちゃんって言うのはっ！？

僕は君の教育係としてですねえ・・・。」

「課長はん。この二人は放っておいて話を始めまひよ。」

胡散臭い笑みを浮かべ春日祐かすがゆうはそう促した。

「そうだな。」

最近地域から迷惑車両の通報が増えている。
そこで刑事課は交通課と協力し、迷惑車両の取締りを強化する事になった。」

“ジリリリリリ……”

その時、課の電話がけたたましく鳴った。

「はい、武蔵中央署刑事課……。」「
電話の近くにいた刑事課の紅一点、牧野麗まいのれいがすばやく電話を取った。

「はい……。はい、はい……。」

牧野の表情が次第に険しくなる。

刑事課に張り詰めた空気が流れ始めた……。

「わかりました、すぐに向かいます。」

そういうと牧野は受話器を置き……。

「白野金しろのがねの藍之沢宅あいのさわで傷害事件発生です。」
凜とした声でそう言った。

「白野金って……。確か高級住宅街じゃ……。？」

島村はのん気に言いながら地図を指差した。

「そんなことより藍之沢やって!？」

超有名アクセサリーブランドのオーナーやないか!？」

「よし!全員現場に急行だ!」

『はいっ!』

課長の声で全員は現場へと向かった……。

「はいすいません！通してください。」

神ヶ本達は野次馬を押しつけ現場へと入っていった。

「お疲れ様です。」

中庭にいた一人の刑事がこちらに気がついたようだ。

「あ、牛山さん。お疲れ様です。」

「誰？」

挨拶をする神ヶ本の後ろから島村が訪ねてきた。

「君は初めてでしたね。」

武蔵公園前派出所の牛山倫太郎（つしまりんたろう）さんです。

僕が交番研修時代にお世話になった人ですよ。」

「ふううん。」

「牛山さん。こいつが今年入ったウワサの新人、島村ですよ。」

「ほう。この子が……話は聞いているよ。」

「????」

神ヶ本と牛山はなにやらニヤニヤしながら島村を見つめた。

「何だよ二人して！」

そんなことより事件だろ事件！」

「ああ。そうでした。それで……被害者は？」

あいのむねゆづすけ

「藍之沢悠介さん。藍之沢家の長男です。」

彼は後頭部を強く打ち意識不明の重体……。

総合病院へ搬送されています。

詳しいことは現場である彼の部屋へ行かれたほうがよいかと……

。」「
「そうですか。それじゃあ失礼します。」
二人は急いで屋敷の中へと入っていった。

現場である悠介の部屋では鑑識たちが現場検証を行っていた。

「あ、貴啓はん。彼が第一発見者の鈴谷修一すずやしゅういちはんです。
鈴谷はん。すまんけどもう一回その時の事話してもらえますやるか？」

春日に促され鈴谷という初老の男は静かに頷き口を開いた。

「はい。悠介様から今朝の7時頃に起こすよう頼まれていましたので、

10分ほど前に朝食をお持ちし声をかけたのですがお返事がなかったもので……。

まだお休みになっていると思いますして30分後、再びお部屋に向かいました。

ですがまたお返事がありませんでしたので……。失礼かと思つたのですが……。鍵がかかっておりませんでしたので……。

ドアを開けたのです……。そしたら……。」

「悠介はんがここに仰向けで倒れてたそうや。」

春日がその場所を指差しそう言った。

「なるほど……。ベットの足に後頭部をぶつけて……。」

神ヶ本はベッドの足についた血痕を見ながらそう呟いた。

「最後に悠介さんにお会したのは……？」

「お休み前の夜食をお持ちしたのが最後でしたので……。

夜中の12時ごろだったかと……。」

神ヶ本の質問に鈴谷は丁寧に応えた。

「貴啓くん。」

「はい？」

牧野が声をかけてきた。

「あそこにいる男の子・・・彼が昨日の夜不審な人物を見たって言うのよ。」

「本当ですか？」

「本当だよ！」

自信満々に少年は答えた。

「君は・・・？」

まみやけいた
「間宮慶太と言います。」

「藍之沢の長女、和紗さんの許婚やそうや。」

横から春日が口を挟んできた。

「い、いいなづけえええええ！？この歳で！？」

島村は思わず声を上げた。

「悪いかい？」

「だ、だって・・・。」

「確かに僕はまだ中学3年生だよ。」

でも和紗ちゃんを守るって幼稚園のときに約束したんだ。」

間宮は胸を張りそういった。

「うぐぐ・・・。」

島村は何故か彼に負けてしまったような気がして思わずうなった。

「で、昨日見た不審な人物とは？」

島村を無視して神ヶ本が話を促した。

「部活のが終わって・・・家に着いたのが確か8時ぐらいだったかな？」

家の周りをうろつろしながら中の様子を伺っている変な奴がいた

んだよ。」

「ほう。」

「僕が声をかけたら慌てて去っていったんだよ。」

「特徴か何かあるかしら？」

「さあ？多分男の人だろうね。でも普通の背格好だったし……。」

「顔は見えていないんですか？」

「うん。暗かったからね。」

「そう……ですか……。」

神ヶ本の視線の先に一人の少女の姿が映った。

少女は椅子に座り両腕を抱きかかえるようにして小さく震えていた……。

「大丈夫ですか？」

「えっ……。」

少女は顔をゆつくりと上げる。

「顔色が優れないようですが……。」

「あ、あの……私……っ!」

「和紗ちゃんはショックを受けているんだ!そつとしておいてあげてよ!」

間宮が和紗と呼ばれた少女の肩を抱きながら叫んだ。

「す、すみません……。」

神ヶ本は何故かその少女から目を離せなかった……。

すれ違う絆、歌に込められた秘めた愛！ その2

「被害者は藍之沢悠介。24歳。

今朝7時30分頃、自室にて昏睡状態で発見された……………」

課長がそうつぶやくと……………」

「はい。ベッドの足に血痕が付いていましたので

おそらくそこに後頭部をぶつけたものと思われます。

現在は武蔵総合病院に。しかし……………あまり容態はよろしくないようです。」

牧野が声を落としながら言った。

署に戻った者達によってホワイトボードに今回の事件の内容がまとめられていく……………」

「第一発見者の鈴谷さんによれば争った後も衣服の乱れも見られなかったそうです。

ただ窓は開きっぱなし、ドアの鍵も開いていたようです。」

神ヶ本はそういいながらホワイトボードに書き込んだ。

「屋敷におつたのは悠介はん、妹の和紗はんに許婚の間宮慶太はん。そして……………執事の鈴谷はんだけ……………」

「鈴谷さんは悠介さんの夜食を片付けてから空き室や1階の戸締りを確認して

お休みになったそうです。

それが……………夜中の2時ごろ。」

牧野が付け足すと神ヶ本はすばやくホワイトボードに書き込む。

「ふむ。」

それを見ながら伊藤課長は腕を組み唸るように頷いた。

「それから慶太君が昨夜8時頃、不審な男を目撃しています。」

「なるほど・・・その男が怪しいな！」

よし、その男の素性と悠介さんに恨みを持っている者がいないか探つて来い！」

伊藤課長が大きな声でそう言った。

「あの・・・。」

しかしそれを遮るように神ヶ本が呟く。

「執事の鈴谷さんの話では悠介さんは勘当当然で家を追い出されたそうじゃないですか。」

「む？じゃあなんで家にいたんだ？」

神ヶ本の呟きに伊藤課長は尋ねる。

「知らないんですか課長？」

パソコンに向かったまま、加賀美宏明^{かがみ ひろあき}が口を開いた。

「ん？」

伊藤課長はまだピンときていないようだ。

「悠介さんの父・・・藍之沢社長は1週間ほど前に病気で亡くなっ
たんですよ。」

「藍之沢！！！！って・・・あの藍之沢だったのか！？」

伊藤課長はようやく気が付いたようだ。

「なあ・・・被害者の親父さんってそんなに有名人なのか？」
神ヶ本の近くで島村が呟いた。

「知らないんですか？」

藍之沢グループ。大手アクセサリメーカーですよ。」

「アクセサリーだけじゃなく宝石やパワーストーンまで……。最近はいろんな事業に手を出していたみたいけど……。」
神ヶ本と牧野が丁寧に教えた。

「なるほど。縁を切ったとはいえ実の親。葬式で帰ってきていたという事か。」

で、神ヶ本。家から追い出されたって言うのがどうしたんだ？」

「ええ。犯人はどうして藍之沢悠介を襲ったのでしょうか……。」
「何が言いたい。」

「鈴谷さんの話では今日朝食を済ませ次第、悠介さんは帰るといつてたんですね。」

「そやで。」

春日はメモに目を通しながら言った。

それを聞いて神ヶ本は頷くと続けた。

「どうして犯人はわざわざこんな日を選んだんでしょう。」

次の日には家に帰るのに……。

悠介さんは現在一人暮らしですよね？」

「さあ……悠介さんの情報はまだほとんど……。」

春日の言葉に伊藤課長は指示を出した。

「確かに疑問は残るな……。よし、春日と加賀美は悠介さんの周辺を。」

神ヶ本と島村は藍之沢周辺の聞き込みをしてくれ。」

『はいっ。』

4人は返事をするすぐに外へと飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163i/>

スペシャリスト

2010年10月11日00時13分発行